



駿府と今川氏

第19回

山科言継が見た駿府の特産品

『言継卿記』の世界

山科家は、藤原北家四条家流で、管絃・服飾管理を家職とする中級の公家だった。山科言継は、二〇歳代から亡くなる七〇歳代まで実に五〇年にわたって日記をつけており、それが今日『言継卿記』として戦国期研究者にとっては不可欠な史料となっているのである。

五〇年にわたる『言継卿記』の中で、わずか半年間であるが、言継が駿府に滞在したときの日記も含まれている。当時、武士が日記をつけることはほとんどなかったため、この言継の日記によって、その頃の駿府の様子をうかがうことができるというわけである。

言継は、弘治二年（一五五六）九月から翌三年三月まで駿府に滞在している。言継の養母黒木の方が、姉の今川氏親正室寿桂尼のもとに身を寄せており、その縁で駿府に下向し、半年間、今川義元の厄介になっていた。

豊かだった食生活

『言継卿記』を読んでいると、何とんでも注目されるのは、今川氏上層部の豊かでバラエティーに富んだ食生活である。もちろん、京都から来た客人においしいものを食べさせようと、今川氏やその重臣たちが競って言継を饗応しようとしたという側面はあつたろう。しかし、『言継卿記』からその頃の駿府の特産品などをうかがうことは可能である。

駿河湾に面していることもあり、海産物は豊富だった。海老・イルカ・鯉・さわら・あわびなどが食膳を飾り、「沖津鯛」も見える。言うまでもなく興津鯛である。

山の幸として、薯蕷というものがある。これは山芋で、とろろ汁にでもしたのだろうか。イルカの肉とごぼうを一緒にもらったという記述もある。言継もイルカの味噌煮を食べていたのであろう。

その他、すでにみかんは見えるし、もちろん茶も見える。浜名納豆ももらったときは気に入って、その製法を教わっているほどである。かまぼこもよく食べているが、どうやら今

日の板付きのものではなく、ちくわに当たるものではないかと思われる。

なお、『言継卿記』の原本が、現在、東京大学史料編纂所に所蔵されている。それを見ると、駿府に滞在していた半年間だけ、紙質が上等なのである。当時、駿河は良質の紙の生産地としても知られており、いい紙が手に入ったのであろう。

また、あるときは久能街道を歩いて前浜に遊びに出掛け、そこで碁石を拾ったりしていた。



▲言継も出掛けた現在の久能海岸

撮影：水野 茂